

馬のショーまで見れて満足
矢崎正典さん(69) = 穀町 =

町内の一人暮らし老人のふれあい事業や老人クラブの交流会で馬の里を利用しました。ここで馬のショーを見れるとは思ってなく、とても感動しました。広い施設を一望できる上からの眺めもなかなか良かったです。ぜひ、また利用したいです。



娘は馬が大好きになりました
阿部千春さん(29) = 土淵町 =

福祉の里の「のびっこ教室」に参加して、馬の里で娘と一緒に馬との触れ合いを体験しました。馬のぬくもりを感じながらの乗馬はとても気持ちが良かったです。始めは怖がっていた娘も、一人で乗れるようになり、馬がすっかり好きになったようでした。



馬はみんなの注目の的でした
佐藤壮馬君(上郷中3年)

上郷町の交通安全パレードで1日警察署長を務め、初めて馬に乗りました。馬の背中では視線が高く、気持ちが良かったです。馬のパレードは珍しく、地域の皆さんもたくさん注目していました。こうした特色ある取り組みは、これからも続けていってほしいです。



Interview インタビュー

馬とのふれあいを体験した人たちに感想を聞きました

伝統文化を大切にしたい

小向春輝さん(遠野緑峰高1年)

今年初めて、南部流鎗馬に参加しました。馬にも「走りたくない」などの気分もあり、それを理解しながら操るのは難しいですが、やりがいもあります。若い人もたくさん参加して、こうした遠野の伝統や文化がいつまでも残ればいいと思います。



初めての触れ合いに感動

雫石サキさん(75) = 穀町 =

老人クラブの交流会で、75歳にして初めて馬に触れることができました。みんなやさしい馬ばかりで、とても楽しかったです。ひざを曲げておじぎりする馬たちもいて、とてもすばらしい調教ですね。みんな喜んで帰ってきました。また、ぜひ行きたいです。



乗馬を始めて腰痛が解消

菊池典子さん(39) = 穀町 =

昨年5月に初めて利用して以来、すっかり乗馬の魅力にはまっています。週に1回は時間をみつけて馬の里に来ています。乗馬は姿勢も良くなり適度な運動にもなります。長い間、腰痛の痛みで苦しんでいましたが、気が付いたら痛みがすっかり解消していました。



上/フォトエッセイ集「遠野馬物語」の中から、高草さんお気に入りの1枚
 右/馬を撮り続ける写真家・高草操さん
 【いずれも高草さん提供】



高草操さん(51) = 東京都在住 =

遠野には、伝統に培われた人と馬とのいい関係を感じる

遠野の夏山で、馬たちが野生放牧されていると知り、平成14年の夏に初めて遠野を訪れた高草操さん。「荒川高原にはほ野生の状態で放牧され、自らの意思と知恵で暮らしている馬たちを目にしたとき『遠野の馬たちは、馬らしく生きている』と感じました。ずっと昔から人と馬とが暮らしていたという伝統や風土に培われた、遠野にしかない人と馬とのいい関係を感じました」と、当時の印象を振り返る。高草さんは、全国でも珍しい馬を専門に撮り続けているカメラマン。遠野の馬に魅せられ、遠野の馬にかかわる行事に顔を出してはシャッターを切り続ける。今では知り合いも増え、遠野

を訪れる新たな楽しみもできたという。今年2月には、7年間撮りためた遠野の馬と人々の写真を「遠野馬物語」というフォトエッセイ集にまとめた。高草さんが引き寄せられた、遠野の人と馬とが織り成す世界が写真の中に生き生きと収められている。「全国の馬産地の中には、生産しても売りに出すチャンスがないところもあります。そうした中で、遠野では乗馬市場が36年間も続いているのはとてもすごいことです。遠野はまさに『活きた馬産地』。若い担い手たちを大事にしなが、ぜひこの伝統を守り続けてほしいです」と、これからの遠野に期待を寄せている。

川島亜紀子さん(39) = 附馬牛町 =

一緒に買い物ができるような馬が身近な環境になってほしい

川島亜紀子さんは、東京生まれの東京育ち。それまで事務職しか経験したことがなかった女性が29歳で遠野に移り住み、今では附馬牛町で畜産業を営む立派な遠野人だ。そんな川島さんも、2年前からポニーの飼育と繁殖を続ける馬生産者の一人。「わたし自身もそうだったように、馬と触れ合うと言っても、女性や子どもには大きな馬に抵抗があります。ならばポニーがいいと飼いはじめました」。今年6月には、初めてポニーの子どもが生まれ、新しい家族の誕生に、二人の子どもたちも大はしゃぎ。子どもたちと同様に、ポニーの子どもも毎日すくすくと育っている。

「馬は人に癒しや、元気を与えてくれます。馬で買い物に出掛けられたり、喫茶店に馬をつないでおく場所があったり、馬がもっと身近にいる環境になつたらいい」と夢を語る。しかしそれは、遠い夢ではなく、現実の夢へと歩み始めている。「最近、子どもたちに馬で通学する練習をさせているんです。都会だったら、馬が道路を歩いたら邪魔だとクラクションを鳴らされるでしょうが、遠野では『懐かしいね』と声を掛けてくれます。今も人と馬とが暮らし続けている遠野だからこそ、実現できる夢だと思っています」と笑顔を見せる。

